

①施設全体のコンセプト

本施設では将来に渡って市民に愛され、未来の子供たちにも活用されるよう、今までにない斬新で且つ普遍的なデザイン性の高い建物を検討します。

川口らしい建物

そこにいるだけで川口らしい、「川口の美」を体感できる場づくりを目指します。川口の歴史ある造園・建造等の工業・映像等のものづくり技術を活かした空間デザイン、そして緑溢れるクリーンな建物(盆栽・植木・屋上/壁面屋上緑化等の検討)を目指します。外部空間(庭や中庭)など自然の要素を取り入れます。

街並もデザインする建物

地域回遊性動線を計画します。地理的な回遊性、関連施設(アトリア・旧田中家住宅等)への利便性を考慮します。街並に積極的に寄与する施設づくりを行い、周辺地域整備を含む景観デザイン・サイン計画を整備し、川口市の景観資産の中心となる施設を目指します。

エコで災害に強い建物

省エネルギー性能が高く、環境への影響が少なく、災害に強い建物とします。環境負荷軽減に努める様々な工夫(輻射熱空調、太陽光発電、地中熱利用等クリーンエネルギー利用、高効率のLED照明等)の検討を行い、CO2排出削減への配慮、施設の超寿命化、ライフサイクルコストの軽減化等を考慮し、持続可能な建物を目指します。

訪れやすくだれにも優しい安全な建物

だれもが快適に利用できるユニバーサルな施設づくりを目指します。障害者対応、多言語対応、点字、音声案内、バリアフリーを徹底します。また、開放的なファサードとし、来館者が気軽に入れる工夫を行い、市民が自然に集い交流できる建物を目指します。自宅にいるようなリラクゼーションスペース＝サードプレイスとしても活用され、賑わいのある憩いの場を作ります。また週末夜間利用可能な警備、運営システムを構築します。

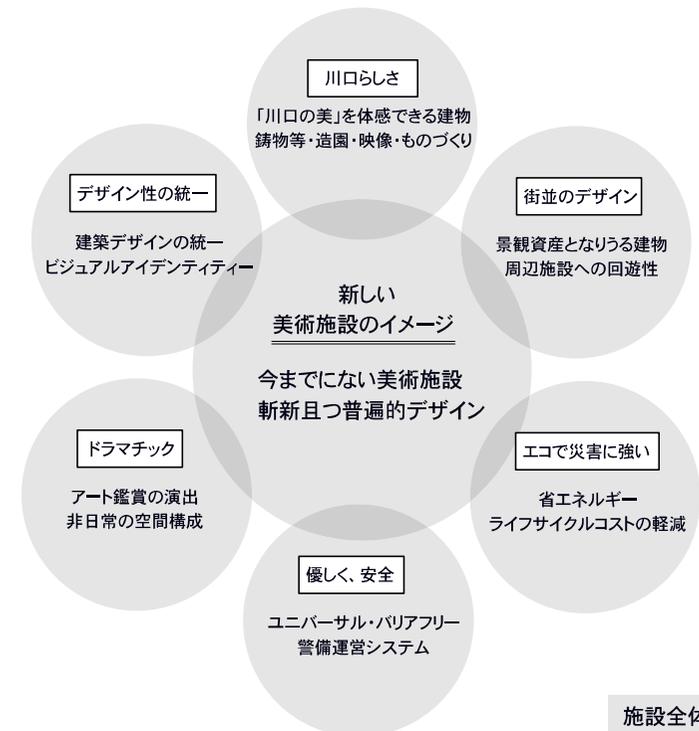
ドラマチックな建物

アート空間をより深く体験するために、建物全体のストーリー性を考慮します。展示室や多目的ホールなどの動線を工夫し、作品を鑑賞する場所へ至るアプローチの構築、ドラマティックな空間構成＝非日常の演出します。全体を見渡せる吹き抜けの採用も検討します。

質の高いデザインの統一性

外観や展示室、アートホールだけでなく、内部諸室(トイレ・階段・各種サイン)にいたるまでデザインの統一を行います。シンボルマーク、サイン、色彩計画、各種パンフレット、ユニフォーム等の建物と統一したデザイン＝ビジュアルアイデンティティの提案を行います。

また、作品を際立たせ、より見近に感じられる展示デザイン・照明計画を行います。



施設全体のイメージ

②施設全体の構成

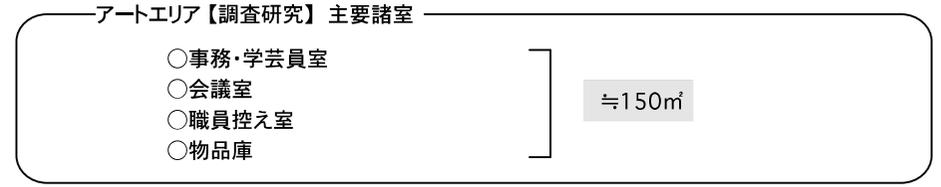
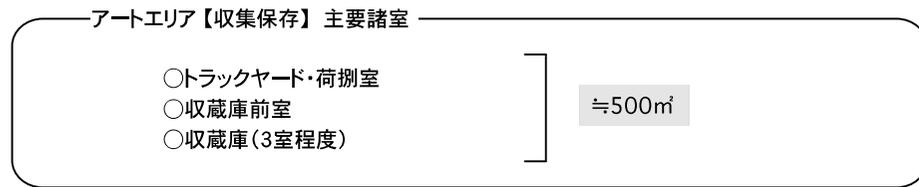
類似施設調査を検討し、概ね4000㎡の規模を想定します。

今後、敷地条件等の設計条件をふまえ、基本設計を通じて全体規模の決定、各エリアの詳細な面積配分等を検討していきます。また、川口市には既存の美術関連施設があり、本来美術施設内部に必要な諸機能をそれらの既存施設を活用する事で、美術施設内の効率的な面積利用を検討して行きます。

展示室 → アートギャラリーアトリア
旧田中家住宅(洋館・和室・茶室や庭を利用したアートイベント等の可能性)等

収蔵庫 → 既存市役所施設の改築 等

市内の既存施設の利用例



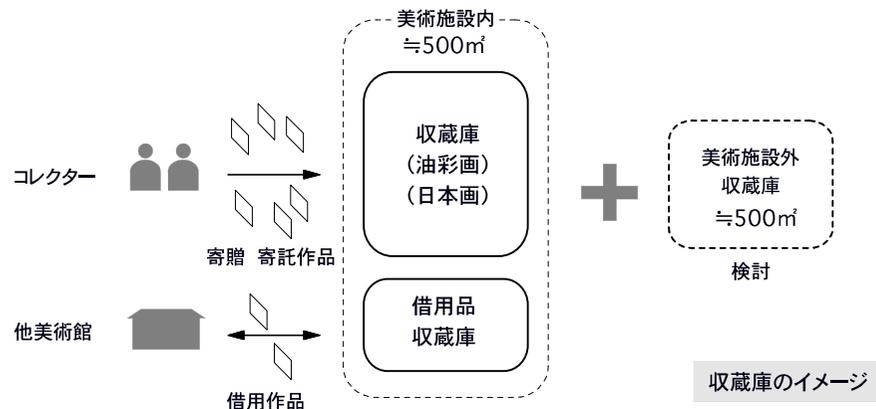
①収集保存部門のコンセプト

収集保存部門では市の所有する美術・工芸作品を中心に今後もコレクションを拡充していきます。収集の方向性は寄贈寄託を中心に分野のバランスを考慮しながら積極的にを行い、川口市らしい収集方針=コレクションポリシーの策定を目指します。

②収集保存部門の構成

面積の効率的利用を考え概ね500㎡の規模を想定します。(参考:川越市立美術館収蔵庫289㎡)収蔵庫のボリュームについては特に貴重な作品を本施設に保管し、今後収集する資料含め、市内の他施設内にも収蔵庫の整備を同時に検討します。

本施設では安全で質の高い保存環境での保管、及び修復・保存を行う機能を実現します。変温恒湿環境に段階的に搬入できるよう搬出入動線に配慮。日本画、油絵、借用資料で異なる湿度調整ができるように複数の収蔵庫を整備します。他の美術館から借用した資料等にも対応できる準備室等も整備。また火災や地震に対する安全性、入退場管理システムや監視カメラによるセキュリティ環境の整備、日射や湿気の影響を防御、断熱対策も考慮し、二重壁構造、省エネに配慮した温熱制御、照明設備等を検討します。



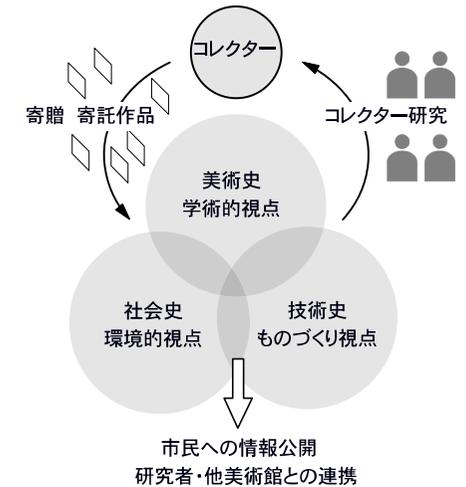
①調査研究部門のコンセプト

調査運営部門では収蔵作品を軸に、川口の美術界、技術、ものづくりの歴史、収蔵作品等を美術史、技術史、社会史視点など多角的な視点から調査研究を行います。川口の文化芸術資産を検証し評価を高め後世に伝えることを目的とします。研究の活性化、情報開覧化を行います。また同時に、コレクターの研究も行っていきます。国内外の美術動向、展覧会の情報収集を行い事業の充実を図るとともにその他企画展で行うことが想定される第一線のアーティストに関する研究を行います。調査研究成果は展覧会企画への反映、紀要等の刊行物、ホームページ SNS等を通じて広く定期的に市民や他の研究者に発信することを検討します。

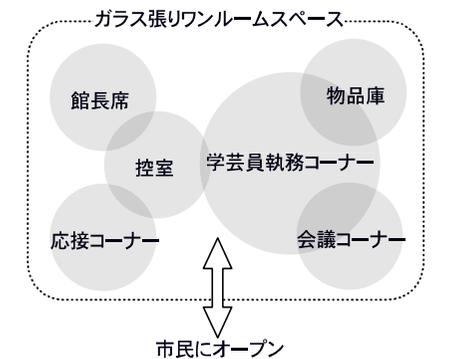
また、他の施設との連携 教育普及活動に特化したアトリアとの連携を軸に他の美術施設、大学研究機関との連携も積極的に取り組んでいきます。

②調査研究部門の構成

面積は概ね150㎡の規模を想定します。学芸員、スタッフ人員は10名程度とし、今後、運営方法をふまえて、必要居室を検討していきます。事務室・学芸員室は開放的な一体的なワンルームスペースとし、面積の利用効率も考慮します。壁面をガラス張りにするなど市民にオープンなワークスペースとします。館長(ディレクター)執務室も含め事務・学芸員の中で活発な議論を促します。また、倉庫には図録等の保管用に集密書架を設け、資料の蓄積を行います。会議室を設け、市民への貸し出し等を検討していきます。



調査・研究方針イメージ



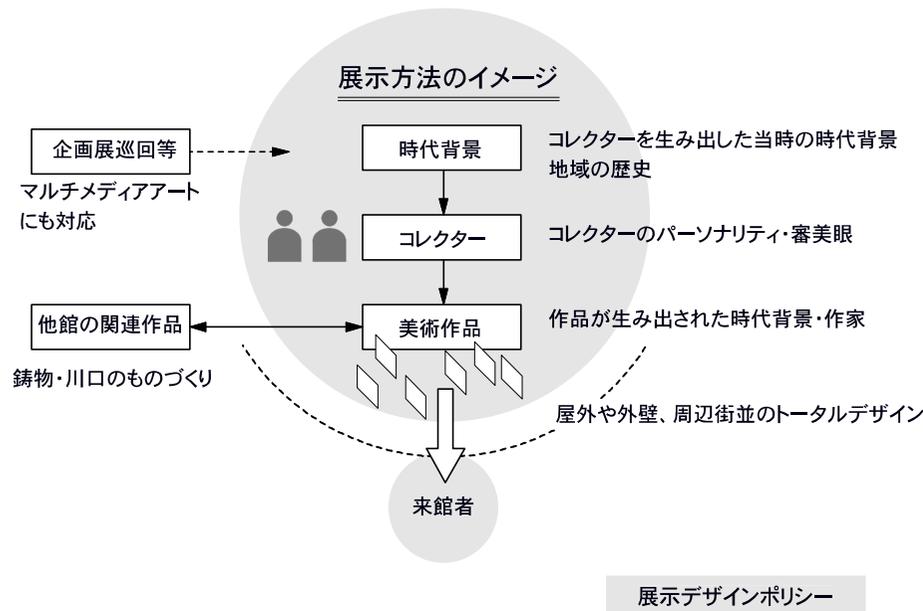
事務学芸員室イメージ



①展示公開部門のコンセプト

寄贈寄託作品を中心に、コレクターのパーソナリティーや、コレクションされた時代背景、川口に収集された理由など、地域性を重視した展示を試みます。また、他の美術館収蔵のコレクションの関連作品など、他の施設と連携による多角的な展覧会も検討し、寄贈・寄託作品の魅力を最大限引き出す展示方法を考えていきます。また、鋳物に代表される川口のものづくりをテーマとした展覧会や、地元作家展等の他、大規模巡回企画展、川口の映像技術のデジタル技術を取り入れた最先端なアート展等に対応できる展示施設とします。

屋外スペースも積極的に活用し、屋外展示室、彫刻作品、建物外壁もアート作品の一部として活用できるように検討を行います。さらに周囲の街並も統一デザインによる案内サイン等を検討しアーバンデザインの視点での展示企画を行います。



②展示公開部門の構成

■展示室規模

川口と人口規模が類似した都市の美術施設と展示室規模を比較検討すると、美術館全体の施設規模、展示作品によって異なりますが展示室の面積は500㎡~2000㎡となっています。

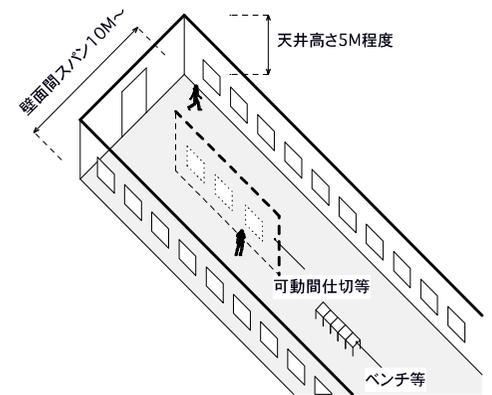
本施設では概ね展示室床面積=約800㎡・多目的ホール=約500㎡の規模を想定します。本施設の場合、多目的ホールも展示室(企画展示室)として活用できることから、展示室+多目的ホールの面積と比較すると、展示室の床面積合計1300㎡と施設全体面積の割合(展示室/施設全体)は34%程度で同規模類似施設と同等と考えられます

■収蔵品の展示

市が所有する現在のコレクションは油彩画:塗師祥一郎約60点 日本画:奥村土牛/横山大観他約20点 その他彫刻他 計110点です。今後も寄贈寄託を中心にコレクションを拡充していきますが、現在市が所有する寄贈作品の主な作品は展示が可能な規模と考えられます。

■展示室のボリューム

一般的に展示室の大きさは壁面間で9M~10M程度であれば両面展示が可能で、中央にも展示ケースや休憩用ベンチなどが置けます。天井の高さは作品の大きさによって異なりますが、企画展示などでは5M程度が望ましいですが、小作品展示では3M程度がよい場合もあり、大きな展示の場合は4M~10Mが一般的です。基本設計で様々な平面形状や天井高さの展示室を検討していきます。



標準的な展示室の構成

■一般的な壁面展示における展示可能作品の数の検討

展示室の形状、展示方法によって展示できる作品の量は異なりますが、標準的な平面構成の展示方法で検討します。

展示室

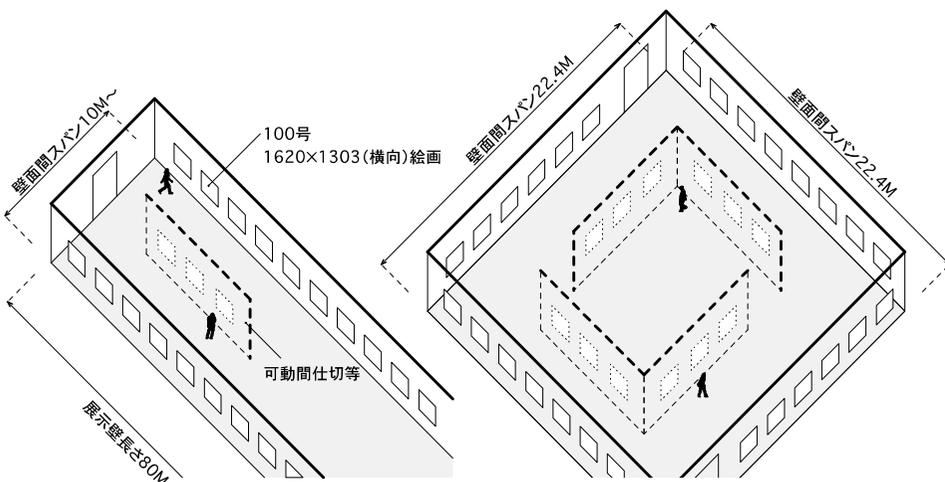
- ◇面積 800㎡と想定
- ◇展示室の壁面間スパンを10mと想定
- ◇展示壁長=800/10×2=160m(短辺は展示には使わない想定)

◆結論:100号 1620×1303(横向)絵画であれば約60点展示可能
※スパン中央に可動間仕切や展示ケースを設置した場合、さらに展示が可能。

多目的ホール

- ◇面積 500㎡と想定
- ◇展示室の壁面間スパンを22.4m(正方形形状)と想定
- ◇展示壁長=22.4×4=約90m(入口付近は展示には使わないとする想定)

◆結論:100号 1620×1303(横向)絵画であれば約28点展示可能
※スパン中央に可動間仕切や展示ケースを設置した場合、さらに展示が可能。



展示室の絵画展示例

多目的ホールの絵画展示例

■プロローグ

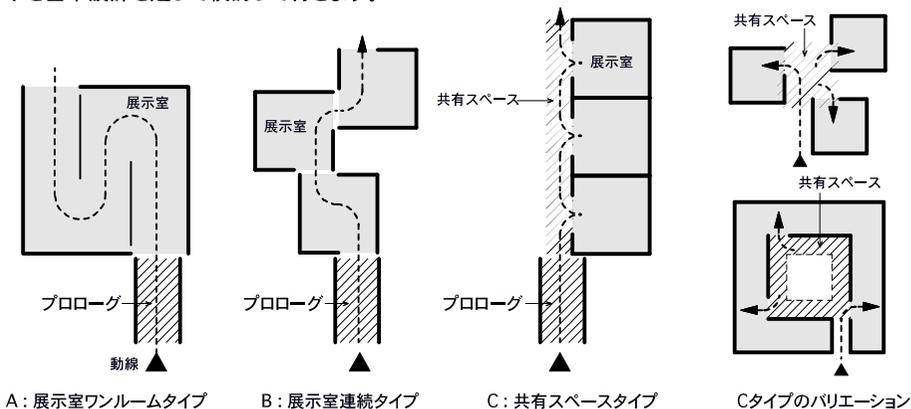
展示室の前にコレクターの紹介を中心に本施設の成り立ちを専門に紹介するプロローグエリアを設けます。プロローグエリアは無料ゾーンとし、エントランスホールやものづくりエリアなどの動線を配慮し、一体化して川口の美を紹介するコーナーとします。

■展示室のレイアウト

展示室の形式には下記のようなタイプに大きく分類されます

- A: 大きなワンルームを仕切ることフレキシブルな展示に対応できるタイプ
- B: 展示室が連続し、無駄がなく展示プログラムを巡回することができるタイプ
- C: 廊下や共有スペースを介し展示室が並び、自由に動線を選択できるタイプ

基本的に展示の動線計画は一筆書き(反時計回りの動線が多い)がわかりやすくよいとされています。寄贈寄託作品には日本画、彫刻、油彩画等様々なジャンルの作品があります。展示にふさわしいレイアウトを基本設計を通じて検討して行きます。



A: 展示室ワンルームタイプ B: 展示室連続タイプ C: 共有スペースタイプ Cタイプのバリエーション

展示室レイアウトの例

■アート図書館

アート全般に関するアート図書館では美術書や他の美術館施設資料など幅広く収集し、地元のアーティスト・ものづくり作家情報と同一視点で閲覧できるよう工夫します。検索端末やリファレンスコーナーを設けます。また、ものづくりライブラリーとの動線を考慮し、資料の一元管理を行います。

イベントエリア【交流・集い】 主要諸室

- 多目的ホール ≒500㎡
 - バックヤード
 - アートカフェ・レストラン
 - 厨房
- } ≒150㎡
- } ≒950㎡

①多目的ホールのコンセプト

一般的に展示室は、常設展示室と企画展示室に分類されますが、本施設では「常設」「企画」というジャンルを取り扱った新しい運営方式を考えて行きます。多目的ホールは通常は常設展のように所蔵作品の展示を行い、その他、他館との共通テーマによる企画巡回展なども行います。また、展示の用途としてだけでなく、広く市民に貸し出しを行い、既存の美術館の概念にとらわれない活用を試みます。

- A: 通常時 → アート作品が飾られた憩いのゾーンとして一般市民に解放された集いの場
- B: 企画展使用時 → 企画展示室として使用、プロジェクションマッピング等映像アートにも対応
- C: 展示会オープニング → レセプションパーティー
- D: 展示会と連動したアート企画 → 舞台、演劇、コンサート、講演会、アートイベント等
- E: 展示会非開催時 → 広く市民、市内企業・団体に貸出し
企業発表会、セミナー、会議、結婚式、ファッションショー、各種教室等

②多目的ホール構成

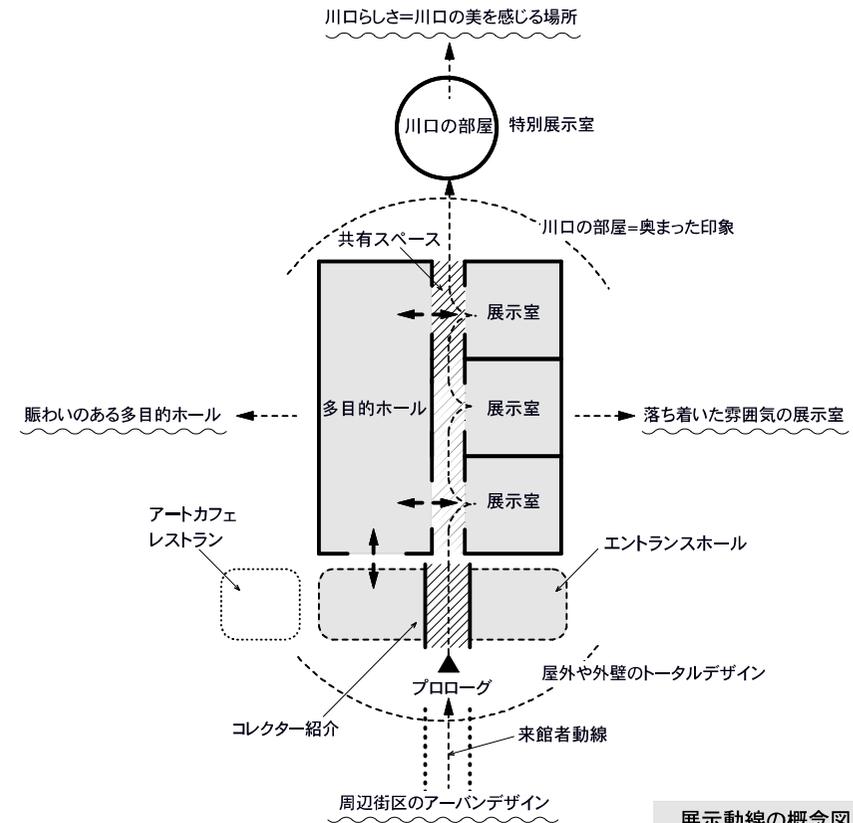
多目的ホールは多用途への対応を考慮し、平土間(通常時は舞台がなく、客席も固定ではない)とします。類似事例を検討した結果、200~300名対応の規模を想定します。形状や仕様、ホール外部の付帯施設などにもより、対応人数に幅がありますが、概ね500㎡の規模を想定します。天井高さは7.0m程度が必要だと考えます。舞台の昇降の有無、備品類の収納スペースなど今後設計を進める上で仕様や面積配分による検討を進めていきます。また、多目的ホールは展示室と連携をとりやすい配置とし、施設全体を一体活用した展示会の実施を実現します。イベント時のホワイエとしてエントランスホールを活用できるよう動線に配慮し、面積の有効利用を検討します。

■アートカフェ(アートレストラン)

誰もが気軽に立ち寄り、アートに関する情報に触れながら交流できる、アート作品に囲まれたカフェ・レストランを併設します。来館者だけでなく、街並に開放され多目的の利用を想定します。また、多目的ホールで飲食を伴う利用がある時はサブ・ケータリングのスペースとして活用されます。客席、厨房設備の規模に関しては今後検討していきますが概ね150㎡の規模を想定しています。

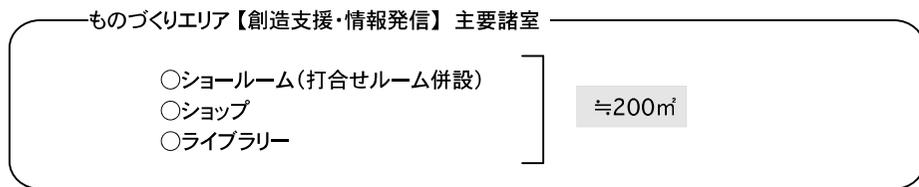
■特別展示室『川口の部屋』

本施設全体のコンセプトを表す小さな特別展示室『川口の部屋』を設けます。『川口の部屋』は川口のものづくり(鋳物等)に関連した作品を常設展示し、美術館の象徴となるスペースとします。来館者動線の最も奥に配置し、落ち着いた環境で、作品を通じて川口の美を体感する場所とします。展示する作品については今後、寄託寄贈の他、新たに製作する事も含めて検討します。



■展示動線のトータルシーケンス

来館者はアーバンデザインの街並、エントランス、プロローグを経て、展示室、多目的ホール。そして川口の部屋へと至る統一したデザインの空間のシーケンスを体験します。それぞれの空間は特徴ある雰囲気を持ち、川口の美を体感するドラマチックな構成を構築します。



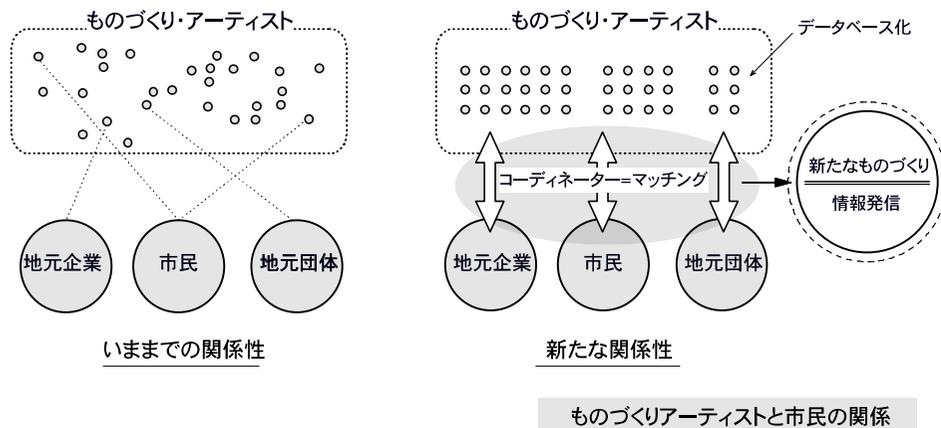
①ものづくりエリアのコンセプト

ものづくりエリアは川口のものづくりの紹介、また、地元企業や市民とものづくりアーティスト、匠をマッチングし、新たな文化、産業を生み出す機会作りを行う創造支援のショールームと、地元ものづくり・アーティスト情報を公開するライブラリー、新たに開発されたオリジナルミュージアムグッズの販売などを行うショップを計画します。

②ものづくりエリアの構成

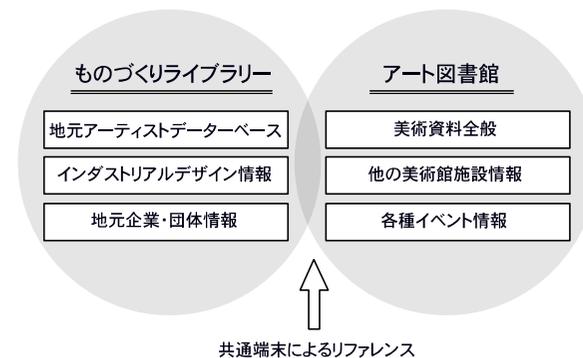
■創造支援=産業とアートのコーディネート機能

ショールームは打ち合せルームとコーディネーター執務コーナーを設けます。専門産業コーディネーター数名が常駐。市内のものづくりアーティスト・作家情報を収集し、データベースを作成し、新たなものづくりを発信するためにアーティストと地元企業や市民、地元団体とのマッチングを行います。そうしたコラボレーションによる製品開発、販売、インダストリアルアートの提案によってアートによる地域活性化を企画します。また、ものづくりをわかりやすく展示できるショールーム(プレゼンテーションルーム)を常設します。ショールームの打ち合せルームは多目的な会議室として市民に貸し出す事も検討して行きます。



■情報発信=ミュージアムショップ・ライブラリー

ミュージアムショップではオリジナルのミュージアムグッズ(収蔵品の図録、書籍、ポスター、絵葉書、文房具、Tシャツ等)の他、地元ものづくりアーティストとのコラボレーショングッズの販売を行います。インターネット販売も行き、情報はSNS、HP等を使い積極的に発信していきます。また、アート図書館と連動したリファレンスコーナーを設置します。



ものづくりライブラリーとアート図書館の関係

①教育連携事業のコンセプト～アトリアとの業務の分担明確化～

アートギャラリーアトリアをより専門性の高い教育普及の施設に特化します。市民にとって、アートへの入口、美術への入門場所=気軽にアートと出会える場所とします。本施設=美術施設に対し、アトリアはサテライトとして位置づけ、アトリアを美術館の一部門として管理します。

一方、本施設では本格的な美術展示施設として、作品を最適な環境で展示することができより深い鑑賞力を養うことができます。最先端の映像技術や、デジタルコンテンツによる鑑賞補助ツールを活用したより専門的、多角的な美術教育も可能となります。学習とアートの境界を取り除くボーダレスな事業の可能性についても検討を行っていきます。

また、本施設とアトリアの合同事業として共通チケットの発行や、2館を結ぶ動線の街並アートデザインなどの整備なども検討します。

●主に本施設で行う事

- 作品解説、わかりやすくアートを理解し親しめるようにする鑑賞補助
(学芸員によるギャラリートーク等)
- 学芸員や専門家、作家、コレクター等を講師に招いた多目的ホール活用イベント
(講演会・講座セミナー・レセプションパーティー等)
- 学校教育機関との連携による、児童・生徒の鑑賞体験
(社会科見学・教員向け講座・美術系部活・大学生インターンシップ等)
- アート図書館・ものづくりライブラリーでの映像デジタルコンテンツの学習活用
(リファレンスコーナー・所蔵作品やものづくり作家、他の市内の施設の紹介情報提供)

●主にアトリアで行う事(基本構想から)

- 展示・公開している作品への理解を深める美術講座
(講演会、講座、鑑賞講座等)
- 市民の創作活動への支援
(創作体験・ワークショップ等)
- 創作工程を見学できる機会
(公開製作・アーティストインレジデンス等)
- 専門的技術を学ぶ機会
(実技講座、技術指導等)
- アートを創造・発信する人材育成
(ボランティア・アートコミュニケーター等)
- 学校教育機関との連携による、児童・生徒の鑑賞体験や創作体験
(作品鑑賞教室・移動美術館等)